

地域高齢者の外出に対する自己効力感尺度の開発

ヤマザキ サチコ イム タヒロ ミ ハシモト ミメ
 山崎 幸子* 蘭牟田洋美^{2*} 橋本 美芽^{2*}
 ノムラ シノブ ヤスマラ セイジ
 野村 忍^{3*} 安村 誠司*

目的 近年、地域で介護予防を進めていくための強化分野の1つとして、「閉じこもり予防・支援」が展開されており、その効果を評価する心理的側面を含めた指標が求められている。行動変容の視点によれば、閉じこもりの改善には、外出に特化した自己効力感が潜在的に影響していると想定されるが、評価尺度は未だ存在しない。そこで本研究では、地域高齢者の外出に対する自己効力感を測定する尺度（self-efficacy scale on going out among community-dwelling elderly：以下、SEGEと略す）を開発し、その信頼性と妥当性を検証することを目的とした。

方法 都内A区在住の地域高齢者18人から項目収集を行い、得られた項目をもとに、某県O市の地域高齢者258人に対する予備調査によって、13項目から成る尺度原案を作成した。本調査は、都内A区在住の地域高齢者8,000人を無作為抽出し、郵送法による調査を実施した。調査内容は、尺度原案、年齢、性別などの基本属性および妥当性を検討するための評価尺度であった。

結果 分析対象者は2,627人（男性1,145人、女性1,482人）、平均年齢73.8±6.6歳であった。週1回以上、外出していたのは全体の86.1%であった。予備調査で作成した尺度原案について主成分分析を行った結果、1因子構造が確認された。ステップワイズ因子分析による項目精選を行った結果、6項目から成る尺度が開発された。これら6項目の内的整合性は、 $\alpha = .96$ であり、高い信頼性が確認された。外出頻度が低いほど、SEGE得点も低かった。SEGEと、動作に対する自己効力感、健康度自己評価および健康関連QOLは有意な相関関係にあり、基準関連妥当性および構成概念妥当性が確認された。さらに、高い相関関係にあったSEGEと動作に対する自己効力感における確認的因子分析を行ったところ、両尺度は相関が高いものの、別々の概念を測定していることを確認した。

結論 本研究の結果、高い信頼性および妥当性が確認された6項目1因子から成るSEGEが開発された。本尺度により、「閉じこもり予防・支援」の心理的側面を測定する新たな効果指標を提案できたと考える。今後、地域で広く活用していくことが求められる。

Key words：閉じこもり、外出頻度、自己効力感、介護予防

* 福島県立医科大学医学部公衆衛生学講座

^{2*} 首都大学東京健康福祉学部作業療法学科

^{3*} 早稲田大学人間科学学術院

〒960-1295 福島県福島市光が丘1番地
 福島県立医科大学医学部公衆衛生学講座 山崎幸子